①バーベキューを楽しみにしながら、台所へお母さんを探しに

題　名：「れん君とふしぎなめがね」

登場人物

れん君・・・・・しっかり者で好奇心旺盛な5歳の男の子。

お父さん・・・れん君のお父さん。

お母さん・・・れん君のお母さん。

チル・・・・・冷気の妖精、なんでも冷やすクールな女の子。

ファイ・・・・炎の妖精、なんでも焼いてしまう熱いヒーロー。

バイキン・・・時にはおなかを痛くする悪いやつ。

れん君とふしぎなめがね　10場面
平成26年9月発行
●発行　兵　庫　県
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5-10-1
TEL 078-341-7711（代表）

※この紙芝居を無断で複写・転写することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

演出ノート

れん君は、元気な5歳の男の子。
今日も外でいっぱい遊んで、おなかをすかせておうちに帰ってきました。

れん君「ただいま～！　お母さ～ん」

おや？　返事がかえってきません。
ふと台所の上を見ると、あれれ・・・お肉がおきっぱなしになっています。

れん君「あれっ？今日のバーベキューのお肉かな・・・。」

そういいながら、お肉のパックを触ってみると、
いつもだったら冷たいはずのお肉が、冷たくありませんでした。

れん君「いつからおいてあるんだろう・・・？」

その時です。

チル「ねえ！れんく～ん！ねえってば！」

れん君「ん？誰か僕のこと呼んだ？」

チル「ここよ、ここ！」

どうやら、声は冷蔵庫の中から聞こえてくるようです。

【ぬく】

②チル登場！

冷蔵庫を開けると、れん君は小さな女の子をみつけました。

れん君「僕を呼んだのは君？」

チル「そう、私は『チル』。いつもは冷蔵庫の中で食べ物を冷やして、バイキンが増えないように見張っているの。

でも、お肉が台所におきっぱなしになっているから、がまんできなくって声をかけたの。」

れん君「へえ～そうなんだ。」

れん君は不思議そうな目でチルをみています。

チル「実はね、お肉のまわりにはもともとバイキンがついているの。

この『ミラクルめがね』をかけてみて。

ほかの人には見えないめがねなの。お肉についたバイキンがどんどん増えているのがわかるわよ。」

【ぬく】

演出ノート

びっくりして

不思議そうな感じで

③ミラクルめがねをかけたれん君。するとお肉にバイキンがたくさん！

ミラクルめがねをかけたれん君、置きっぱなしの肉のまわりになんだか黒いものがたくさんいるのをみつけました。

れん君「これはなあ～に？」

チル「これがバイキンよ。バイキンがれん君たちの体に入ったら悪さをして、おなかが痛くなったり、熱が出たりするのよ。」

れん君「うわ～！バイキンがいっぱい！たいへんだ～！」

バイキン「どーんどん、どーんどん増えてやる～♪ いっぱいいたずらしてやるぜ～♪ どんどん どーん、どどんど どーん♪」

バイキンたちはさわぎながら、仲間をどんどん増やしています。

れん君「チル、どうしよう・・・。」

チル「私は、バイキンがこれ以上増えないように冷やして眠らせることができるわ。だかられん君、急いでお肉を冷蔵庫に入れて！」

れん君「うん。わかったよ。」

そういうと、れん君はお肉を冷蔵庫に入れました。

【線までぬく】

演出ノート

リズムに乗って

とまどった感じで

こ　こ　ま　で　ぬ　く

④チルの冷たい息で、バイキンたちは眠ってしまう。

チル「さあ。バイキンたち大人しくしなさい！」

そう言いながら、チルが大きく息を吐き出すと、冷たい空気がバイキンたちを覆いました。

【ぬく】

演出ノート

ふるえた感じで

バイキン「さ・・・さむい・・・。これじゃあ、増えることができないぜ～」

今まで騒いでいたバイキンたちは静かになり、みんな眠ってしまいました。

れん君「うわあ～。チル、すごい！」

チル「えっへん！こんなの簡単、簡単！しっかりと冷やしたからバイキンたちを眠らせることができたわ。でも、まだ安心はできないの・・・。」

れん君「どうして？」

れん君は不思議そうです。

チル「バイキンたちは、今は寒さで眠っているけど、冷蔵庫から出したらまた目をさますわ。」

れん君「ええっ・・・。じゃあ、どうしたらいいの？」

チル「バイキンは炎の力に弱いの。」

れん君「そうか！お肉をやいちゃえば、バイキンはやっつけられるんだね！」

チル「正解！」

その時、れん君を呼ぶお母さんの声がしました。

チル「じゃあね、れん君」

そう言うと、チルは冷蔵庫の中へ消えてしまいました。

【ぬく】

こ　こ　ま　で　ぬ　く

⑤楽しいバーベキューの始まり。
バイキンが炎の力でいなくなっていく。

家族で楽しいバーベキューが始まりました。
れん君が、ミラクルめがねをかけてお肉を見ているとなんだか
バイキンたちがさわいでいます。

バイキン「やばいよやばいよ。あついよ。やられちゃうよ。」

れん君「うわ〜っ！炎の力でバイキンがどんどんいなくなっている！
チルの言ったとおりだ！」

その時です。炎の中から何かが飛び出しました。

【ぬく】

演出ノート

あせった感じで

⑥ファイの登場。

ファイ
「やあ、れん君。僕の名前は『ファイ』。炎の使いさ。バイキンなんか、
僕の力でいちころさ！」

れん君
「そうか！バイキンがどんどんいなくなっているのはファイの力なんだね。」

ファイ
「あ～そうさ。僕は炎の力で食べ物をおいしくするだけじゃなくて、
バイキンをやっつけてみんなを守っているのさ。」

ファイは得意げです。

お母さん
「さあ、お肉が焼けたわよ！」

お母さんはそう言いながら、れん君のお皿に焼けたお肉をのせてくれました。

れん君
「おいしいね。僕、バーベキューだ～い好きっ！」

れん君はおいしそうに焼けたお肉を食べています。

お父さんが、お肉を食べようと箸をのばしたその時です。

【ぬく】

演出ノート

自信満々に

⑦お父さんが箸をのばしたお肉にバイキンがついているのを発見！
ファイアーパンチをおみまいする。

ファイ「危ないっ！そのお肉はまだ焼けてない。中が赤色だ。ほらっ！バイキンがまだついてるぞ！」

バイキン「しまった・・・見つかった。」

ファイ「逃がさないぞ。バイキンめ！こいつをくらえ！ファイアーパーンチ！」

バイキン「うわ～やられた～。」

炎のパンチを受けたバイキンは、遠くへ飛んでいきました。

れん君「ファイ、お父さんを助けてくれてありがとう！」

ファイ「どういたしまして！これくらい、なんてことないさ。お肉は中までしっかり焼くことが大事なんだ。そうじゃないと、バイキンをすべてやっつけることはできないんだ。」

れん君「うん、わかった。僕、気をつけるよ！」

そしてバーベキューが始まってから時間が経ち、炎も小さくなってきました。

【線までぬく】

演出ノート

ヒーロー風に

ゆっくりさとすように

こ　こ　ま　で　ぬ　く

⑧お肉にバイキンがついているのを発見。バイキンにファイアーパンチをおみまいするが…。

れん君「あれれ？」

れん君は不思議に思いました。お肉のバイキンが、なかなか消えないのです。

れん君「ファイ！お肉についているバイキンたちをやっつけて！」

ファイ「オッケー！僕にまかせて！」

ファイは、そう言ってバイキンめがけファイアーパンチをおみまいしました。

ところが、さっきと様子が違います。

バイキン「そんなパンチじゃ俺たちをやっつけることなんて、できないぜ～。」

バイキンはピンピンしています。

ファイ「しまった・・、炭が足りない。炎が弱くなって、ち・・ちからが出ない・・。

れん君、力を貸してくれないか？」

れん君「どうしたらいいの・・・？」

ファイ「炭を足してほしいんだ・・・。」

れん君はお父さんといっしょに急いで炭を足しました。

【ぬく】

演出ノート

自慢げに

よわよわしい感じ

こ　こ　ま　で　ぬ　く

すると、バーベキューの炎がぐんと強くなりました。

ファイの力が、メラメラ湧き上がってきます。

「れん君、ありがとう！」

ファイ　そう言いながら、バイキンに向かってひとっ飛び。

【ぬく】

⑨ファイの力が
パワーアップ、
ファイアービーム
でやっつける。

ファイ
「僕の必殺技をうけてみろ～！ファイアービーム！」

ファイのビームは、バイキンに命中しました。

バイキン
「うわっ！なんてすごい力だ・・・。」

バイキンは、あっという間に消えてしまいました。

れん君
「ファイ、やったね！ありがとう」

ファイ
「れん君たちの協力があったから、バイキンたちをやっつけられたんだ。
こちらこそお礼を言うよ。」

【ぬく】

演出ノート

⑩ファイとの別れ

れん君
「僕、このミラクルめがねのおかげで、よーくわかったよ。バイキンたちが悪さをしないように、チルやファイが守ってくれているんだ。
僕たちが元気でいられるのは、冷蔵庫や炎の力のおかげなんだね。」
ファイはれん君の言葉を聞いて安心しました。

ファイ
「れん君、僕もう行かなくちゃ。じゃあ。」
そう言いながら、ファイは炎の中に帰っていきました。
そして、気がつくとれん君がかけていたミラクルめがねも消えていました。
れん君には、もうバイキンたちは見えなくなっていました。
でもれん君は平気です。
だって、ファイとチルに大事なことを教わったから・・・

【おしまい】